仏教における救済と共生 ——衆生の「苦」と菩薩の「悲苦」——

長 崎 陽 子

I はじめに

釈尊は自らの苦の問題を苦・集・滅・道の四諦の理、あるいは無明から老死（苦）に至る十二支縁起を觀ずることによる苦の原因究明によって解決し、悟りを得て、それを弟子達や民衆に説き示したといわれる。

この釈尊の教説を受け継いだ者達は、主としてそれを自らの問題と捉え、問題解決のために自らの悟りをめざし修行した。部派仏教ではこの苦の原因としての煩惱に関する緻密な分析が盛んとなり、煩惱の止滅のレベルによって修行の到達段階が設定された。

ところが、大乘仏教になると菩薩という「上求菩提 下化衆生」を目的とする存在に焦点があてられ、そこに従来の「上求菩提（自利）」を主とする仏教から「下化衆生（利他）」という衆生救済の仏教への展開をみることができる。ここに「救済する菩薩」と「救済される衆生」という構造が成り立つのであるが、大乘仏典をみると菩薩が衆生の問題（苦）を解決していく場合に、慈・悲・喜・捨の四無量心¹⁾中の「悲」が重要な役割を果たしていることが知られるのである²⁾。

そこで本研究では、菩薩の「悲」と衆生の「苦」の関係について特徴的な解釈がみられる『大乘莊嚴經論』、およびその復註である安慧『莊嚴經論釈』を取り上げ、仏教における衆生救済のあり方について検討していく。

これらの文献では、菩薩は悲に基づいて衆生を救済するために、衆生の苦をみて菩薩自身も同様に苦しむことが必要とされる。これを菩薩の「悲苦」という。さらに菩薩は自他平等という理解によって衆生の苦しみを受け、衆生を救済するのである。そこには「救済する菩薩」と「救済される衆生」という関係があるものの、一方向的な救済ではなく、自他平等という理解のもとに菩薩が衆生の苦を共感し、衆生と共に生きようとする、いわば「共生」といえる姿がある。

II 菩薩の「悲」と衆生の「苦」の関係について

『大乘莊嚴經論』では、菩薩の悲と衆の苦との関係について、
〔衆生の〕苦の滅のために、菩薩たちには悲によって苦が生じる³⁾。

と述べる。これは衆生の苦の滅のため、つまり救済のために菩薩は悲による苦（悲苦）を生ずることを明確にしたものであるが、それではこの菩薩の悲苦とはどのようなものであるのか、安慧はこれについて

衆生の苦を感受することから、菩薩は悲に基づき、それ（悲）によって自ら進んで苦を生じさせる⁴⁾。

と註釈している。これによると、菩薩の悲苦とは、衆生の苦を感受することであり、さらに菩薩は自ら進んで苦を生じさせている。これは『大乘莊嚴經論』における救済の基本構造を表明している文であるが、『大乘莊嚴經論』では、この菩薩の悲苦についてさらに段階的な説明を施している。

III 菩薩の「悲苦」と衆生の救済

『大乘莊嚴經論』では、先の菩薩の「悲」と衆生の「苦」の関係に続いて、さらに衆生を救済する菩薩の資質に関する説明をする。

それは、信解行地（地前）と清淨意樂地（地上）という修習過程によって菩薩の悲苦に対するあり方が異なるというものである。

まず信解行地においては「〔悲によって生じたその〕苦ははじめに信解行地において〔菩薩を〕恐れさせる」とし、この理由を「自他の平等の観点から苦を如実に証しないからである」とする⁵⁾。

これに関して、安慧は

信解行地においてとは、このように苦から〔衆生を〕救済することができないと考えて、恐れが生起するのであって、どうしてかといえば、自己と他の平等心を理解しないことと、一切の苦が空であることを理解していないことからである⁶⁾。

としている。

ここで注目すべきは、信解行地の菩薩に関して、自他平等の心を理解していないことと、苦の空性を理解していないことによって衆生を救済することができないとする点である。

次に、清淨意樂地の菩薩であるが、これは信解行地の菩薩と同様、衆生の苦を観て苦しむが

清浄意楽地（＝歓喜地）において〔苦を如実に〕証するとき、〔その苦は菩薩を〕喜ばせる⁷⁾。

と『大乘莊嚴經論』では述べられている。

これについて、安慧の復註では

〔初〕地が歓喜であるという理解によって、法界に遍行するという特性を知り、自己と他の平等の心を理解することによって、一切の苦を空性として、〔初地に〕悟入した後、衆生のために苦を受けるべきである。そして、大いに喜びの心が生じるという意味である⁸⁾

とし、さらに

法界に遍行するという特性を知ることによって、自己と他が平等である心を獲得することによって、一切の苦が空であることを知ることによって、苦に対して恐れることが生じない⁹⁾。

と、説明を加えている。

この清浄意楽地の菩薩のあり方は信解行地の菩薩のあり方と比べて対象的であり、清浄意楽地の菩薩は衆生の苦を観て同様の苦しみを受けながらも、喜びの心を生ずる。なぜならば、清浄意楽地の菩薩は苦の空性を理解し、自他平等の心を獲得しているから、衆生を救済できないという恐れを克服している、つまり衆生を救済することができるからである。

IV 結び

『大乘莊嚴經論』では、菩薩自身が、衆生の苦を観て、衆生の苦を感じ、菩薩自ら悲に基づく苦（悲苦）を生ずることが記述されている。

しかし、この悲苦を生ずることが直ちに衆生救済に結びつくのかというところではない。『大乘莊嚴經論』では、これをさらに信解行地（地前）の場合と清浄意楽地（地上）の場合とに区分けし、信解行地の菩薩は自他の平等を理解せず、苦の空性を理解しないために衆生を救済できないとするのに対し、清浄意楽地の菩薩は、自己と他が平等であるという心を獲得し、一切の苦が空であることを知り、これらによって苦に対しての恐れが生じなくなるから、喜びの心をもって衆生を救済することが可能であるとするのである。

したがって、『大乘莊嚴經論』では、菩薩と衆生の関係は一方的な救済ではなく、菩薩が衆生の苦の本質を見極めた上で共感し、さらに自他平等であると観ずることに基づいての救済であることを明確にしているのである。

ここで注意すべきは、衆生が救済されるかされないかという問題の鍵は、常に

救済する側が握っているということである。つまり、衆生の抱えている問題を菩薩が共感するレベルでは、救済(衆生の悟り)は成立しない。ここで問われるのは衆生の問題を共感している菩薩の資質であり、真に衆生を救済できる菩薩は、自己と他が平等である心を獲得し、問題の本質を証得している者でなければならないのである。換言すれば、仏教において救われる側(衆生)に求められる「信」なども、救済する側の資質が備わっていなければ生ずることはないともいえるだろう。

このことは、近年、頻繁に仏教と関連づけられて多義的に解釈されている「共生」や「平等」、あるいは「救済」という言葉を理解する一つの方向性を示していると筆者は考える。

1 四無量心については、比較的唯識論書に詳しい記述がみられ、その思想的展開を窺うことができる。

拙稿「唯識文献における三縁の四無量心について」(『仏教学研究』第55号 1999)

2 大乘仏典以外、例えば『俱舍論』等にも悲の修習に関して詳細な記述はある。それは「有情は実に苦しんでいる」と想定し悲を生じさせるというものであるが、これは有情が救われることを希望しているにすぎない。

P. Pradan: *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu* 1967. p. 454

桜部 健『仏典講座 18 俱舍論』大蔵出版株式会社 1981. p. 239

3 S. Lévi: *Mahāyānasūtrālamkāra* 1907. pp. 127. 114-128. 12

龍大 A 本 116a2-116b1; 龍大 B 本 126a2-9; D. 217b1-5; P. 239a2-8

4 *Sūtrālamkāra Vṛtti bhāṣya* D. No. 4026.70b2-3 (以下 SAVBh)

5 註3. 参照

6 SAVBh D. 63a5-6

7 註3. 参照

8 SAVBh D. 70a7-70b1

9 SAVBh D. 70b5

〈キーワード〉 苦, 悲苦, 救済, 『大乘莊嚴經論』

(龍谷大学大学院研究生)